

当教室の新谷教授の記事が全国47紙に連載されました。

インプラントの
課題
①

歯を失った人のあごの骨に埋め込み、成功すれば自然に近いかみ心地が得られるとされるインプラント（人工歯根）。多くの歯科医が治療を手掛ける中、トラブルが表面化するケースも珍しくない。望ましい医療への課題は何か。

××××
昭和大歯科病院（東京都大田区）口腔（こくう）外科では、別の医療機関で受けた手術の失敗や、説明に不信を持ったとして訪れる患者が増加傾向にあるという。

「インプラントであごの神経を損傷してまひが起きたり、組織が傷ついたりするケースのほか、上あごの骨を突き抜けて上顎洞（じょうがくどう）という鼻の奥の空洞に入ってしまうこともある。原因は経験や技量不足のこともあるし、症例数の多い医師が慣れのあまり段階を踏まずに失敗することもある」。同病院の新谷教授はこう話す。

金属のチタンでできた土台部分を患者のあごの骨に埋め込み、そ

トラブル増加

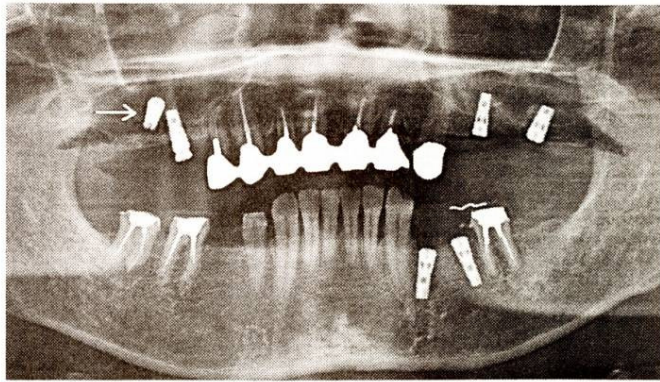
治療成功には総合力必要

の上に人工の歯を乗せるのがインプラント治療。長年の研究でチタンと骨はしっかりと結合することが確かめられ、急速に普及した。骨に穴を開けるため、CT（コンピューター断層撮影）などの画像診断を併用して骨や血管、神経の位置や状態を把握し、治療計画を立てることが重要になる。さらに、埋め込みの手法や上に乗せる歯のかみ合わせなど「治療成功には歯科医としての総合力が必要だ」（新谷教授）という。治療時に出血が止まらなくなり、救急搬送されたが死亡した患者。埋め込みに失敗したインプラントを別の患者に使い回したと地元歯科医師会などに指摘され、行政が調査に乗り出した医師……。こうした問題以外に、治療に関する訴訟も各地で起きている。

新谷教授は「患者さんの多くは普通、何かあっても目の前の医師のことを悪く言わない。われわれのところに来るような人は、よほどのことがあり『裏切られた』という気持ちを持つ人ではないか」。その背後に、適切な治療を受けられない人がもっているのではないかと心配する。

トレーニングを積んだ医師が行い治療が成功すれば、埋め込んだインプラントの96〜97%は10年後も機能する。「私自身も、自分の歯を失ったらこの治療を選択する」

モラルを失った医師は言語道断だが、患者も安易なうたい文句に乗らず、骨の中に異物を入れる、手術を伴う治療だということを頭の中に入れておいてほしいと強調する。



手術時に上あごの骨を突き抜けて鼻の奥の上顎洞に入ってしまったインプラント（矢印）（新谷悟・昭和大歯科病院教授提供）